



好学愛知 自律敬愛 質実剛健

鶴丸イ言

鹿児島県立鶴丸高等学校

〒890-8502 鹿児島市薬師二丁目1番1号

TEL 099-251-7387 FAX 099-255-3433

http://www.edu.pref.kagoshima.jp/sh/Tsurumaru/top.html

4月の行事予定

Calendar table for April with columns for date, event, and status. Includes events like '第1回職員会議', '新任式 前期始業式', '第71回入学式', '対面式 新入生テスト 復習考査', '創立記念日', '甲南鶴丸スポーツ交歓会', '学年朝会', '心臓検診', '新体力テスト', 'PTA評議員会', '昭和の日'.

今年度最後の『鶴信』となった。『鶴信』は平成十七年四月に第一号が発行され、今回で一一六号となる。第一号を見ると、鶴丸への一層の御協力と御理解を頂きたいとの思いから創刊にいたったと記されている。今日までその思いを引き継いで発行し続けてこられた先生の先生方に、心から敬意を表したいと思う。今年度最後と言ったが、私にとつて最後の寄稿となる。私事で恐縮だが、今年度末をもって定年退職を迎える。ちょうど三年前、赴任直前のある日挨拶と引き継ぎのために学校を訪れた際、生徒達が見知らぬ私に爽やかな挨拶をしてくれた。この生徒たちと毎日過ごせることに胸が躍った。今でも消えることのない、懐かしい思い出である。以来この三年間、多くの方々にお世話になった。この場を借りて、心からの感謝を申し上げたい。先日、卒業式があった。私にとつて教員人生最後の卒業式であり、また、卒業生とは共に三年間を過ごしたという思いもあって、この「かへらざる三年」を思い出しながら式に臨んだ。「いつてらっしゃいませ」という言葉で卒業生を送り出した。辞には、先輩たちへの敬意と親しみ、そして今後の鶴丸を担う者としての責任感を感じ、答辞では三年間の思い出と支えてくれた人々への感謝と共に、社会に貢献できる人間になることへの強い決意が述べられ、大きな頼もしさを覚えた。高校生とはこれほどまでに成長するものなのか。その余韻の中で歌われた校歌は、これまでに聞いたどの校歌よりも身に染みわたった。本校は平成三十一年度創立二五周年を迎える。現在同窓会の方々

かへらざる三年 学校長 豊島 真臣



を中心に準備が進められているのが、新たな取り組みとして「短期海外研修」が企画されている。これは将来、鹿児島はもとより、日本あるいは世界を舞台にしたグローバルリーダーとして活躍する人材の育成を目的としたものである。卒業後長い時間が経過しても後輩への愛情と母校への誇りを持ち続けていらつしやる同窓会の方々には、本当に敬服する。心から感謝申し上げたい。校長室を出て二階の廊下から中庭を見下ろすと、「樗咲く学風ここに酔乎たり」の句碑が見える。本校で教鞭を執られた西村一意先生の句である。生徒諸君には、多くの先輩方が鶴丸の歴史と共に育んでこられたこの学風の下、希望や目標を大きく持つて勉学に励み、心豊かで人のことを思いやり、社会に貢献できる人間として成長してほしいと願っている。 一道を行く者は 孤独だ 前から呼んでくださる方があり 後から押してくださる方があり

私は六十一回目の春を迎えている。校内の木々は、草寿庵の紅梅から寒緋桜・川津桜・白木蓮・ソメイヨシノ・ツツジ・藤へと開花し、やがて芽立ちも勢いづいて季節を鮮やかに彩っていく。この度定年を迎える豊島校長と私にとつては、人生における一区切りの春となる。第六十八期卒業生の前途を祝福し、心を込めて「行つてらつしやいませ」と送り出した在校生諸君は、どのような春を迎えているのだろう。私事で恐縮ではあるが、そもそも春は、私にとつて感謝の季節である。亡き両親の名前は、二人とも春（ハル）



六十一回の春を想う 地歴公民科 奥村 清喜 鶴丸高校の行く末を、いつまでも応援していきたい。

最後の勤務校となった鶴丸での春も、緩やかとは言えない。これまで経験したことのない忙しさがある。センター試験後の個別試験で、地歴公民を必要とする大学を目指す三年生への指導である。地

の文字が使われており、それは父が三月生まれ、母が四月生まれだからである。父は周囲の人から自分の名前を逆さまに呼ばれても、宛名に間違つた漢字の名が書かれていても全く気にしない無頓着な性格で、母の名前は片仮名だったので間違えられることはなかった。その春生まれの二人が、六十年前の二月の春に四人の子供として私をこの世に送り出してくれたのだから、春は両親に感謝しなければならぬ大切な季節なのである。これまで駆け抜けていった春たちに、私を育てた貴重な思い出が詰まっている。少年時代に野いちご摘みや早蕨採りに駆け巡つた山国の春。自転車転倒で右膝を怪我して、母に背負われ約二キロも先の病院に運ばれた情けない春。片道二十キロの自転車通学をやり遂げた高校生活最後の春。それに大学入試後クラスの学友達と登った竜峰山の解放感に満ちた春。学生時代に勢い余つて学内の夜の桜の枝を折つた苦しい春。教員採用試験に失敗し、来年こそはと自ら背水の陣を敷いて不転の覚悟を決意した春。 教員になってから、これまで緩やかにのんびりと過ぎていた春は激変した。どんな職場に就職してもそうであるが、学校という職場では、年度末整理と新年度準備の忙しさの中で卒業式・入学式及び離任式・新任式の新旧入替が、短期間に行われる。教員生活で最も肉体的にへとへと春となったのは、二校目に赴任した離島でのことだった。仕事もしつづつ、転出転入の先生方の引越つしと見送り・出迎えが連日続くからだ。昼間の荷出しと夜の名瀬港での見送り後、奄美大島南部の宿舎にたどり着くのは、夜中一時過ぎだった。そのまま翌朝の四時に起床して、新任の先生を名瀬港で出迎えるという一つとなった。今では懐かしい思い出の一つとなった。

お知らせ

この春の人事異動が発表になりました。これまで本校の発展に寄与してくださった先生方、本当にありがとうございました。

Table of staff changes with columns for Name (氏名), Department (教科), and Transfer Destination (転出先). Includes names like 豊島 真臣 (校長), 榎田 俊光 (教頭), 里村 大志 (地公), etc.

歴公民科スタッフ全員で科目ごとに分担して、各々が毎日二時間の特別授業のほか添削指導も行う。予習復習に追われる生徒も準備に追われる教員も、この六週間必死になって論述問題と向き合い、真剣勝負のやりとりを続ける。休日返上で添削しないや間合に合わないこともある。しかしながら、真剣勝負だからこそ楽しくもあり面白くもある。生徒だけでなく教員も成長させ、シナジー効果を生むこともある。後日、生徒は試験報告や合否報告にやつてくる。結果はそれぞれだが、私たち教員への感謝と次のステップへの抱負と希望や覚悟が伝わってくる。 「鶴丸は勉強するところである」と言い伝えられている。学問だけでなく鶴丸でのすべての活動や生活が、学びの場であり、自分自身をより人間らしく豊かに高める場である、ということであろう。在校生諸君が、この一年間又は二年間どう高まったかは、校内の木々が、この間どれくらい大きくなったか一目では分からないように、自分では気づきにくいものだ。だが、諸君は間違いなく高まっているはずだ。それでも自分の成長に気付かず、己の不如意を嘆いたり辛酸を嘗める思いをしつたりして、悩んでいる人もいるかもしれない。実はそれも成長であり、自らを高めることではないか。 風雪に耐えつづつ鶴丸を永く見届けてきたシンボル樹である、中庭の四本の樗やメタセコイアの巨木は、一昨年の大がかりな枝打ち等の剪定作業で一時は大丈夫かと心配したが、次の春には以前より深い濃緑の葉をつけ、風薫る頃には芳しい薄紫の気高い花を咲かせた。在校生諸君もこの春、無駄な枝はないか、伸びきった枝はないか、どの枝を伸ばすべきかを考えながら、自分自身をバランスの良い樹形に整えて、それぞれの気高い高邁な花を咲かせられるよう、残された高校生を送つて行つて欲しいと願っている。